

第IV部門

天龍寺周辺における山容景観の特性に関する研究

京都大学工学部

学生員 ○大島 充功

京都大学工学研究科

正会員 出村 嘉史

京都大学工学研究科

正会員 川崎 雅史

京都大学工学研究科

正会員 樋口 忠彦

1. 目的

山容景観には「見え」「見方」の2通りの捉え方が存在すると考えられる。「見え」とは、立体的な山を捉えるときの山容景観の視覚的側面であり、「見方」とは、歴史的な価値づけを考慮したときの山容景観の文化的側面である。そしてこれら両者は、山容景観を形成するうえで密接かつ、複雑に関係していると考えられる。

そこで本研究では、嵯峨嵐山地域において、山容景観における「見え」と「見方」という評価項目を用いて、対象地の多様な山容景観の特性を明らかにする。

2. 方針

対象地における「見え」の全体像を把握するためのGISソフトウェアを用いた分析手順は以下のようである。

- ① 対象地内に200メートル間隔で計100個の観測点を格子状にとった(図1)。

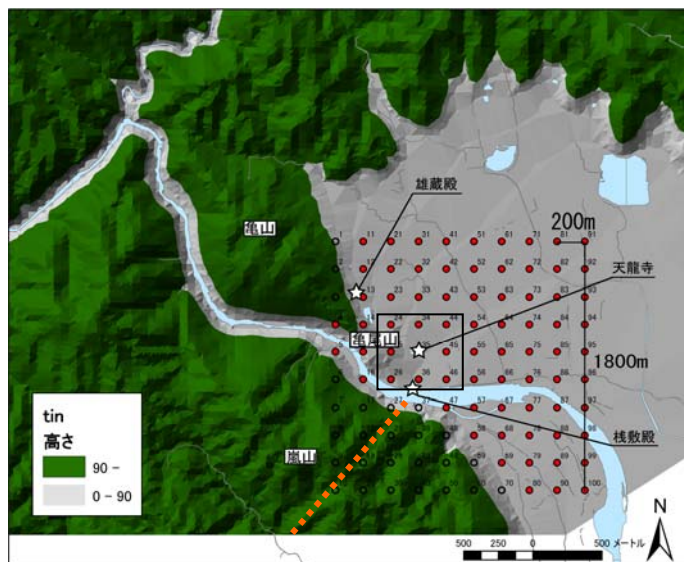


図1 対象地と観測点の位置

- ② 視線角度を仰角10度に合わせて西を中心とした360度の透視形態を全ての観測点から出力した(図2)。

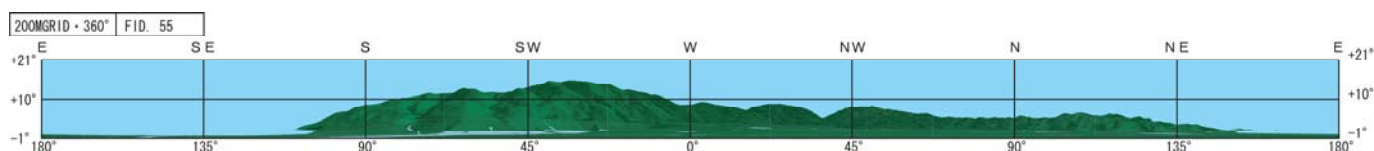


図2 透視形態出力例

- ③ 歴史的に古くから山容景観における「見方」がされており多くの文献によって記されている雄蔵殿、檜敷殿、天龍寺を固有視点場として選定し、そこから同様に透視形態を出力した。また、稜線の最も高いところ(頂部)の仰角を測定し、視点場と頂部の断面を出力した。例は図3に示す。

「見方」は固有視点場ごとの絵図・文献などの史料などから分析し、「見え」との関係を考察した。

3. 固有視点場における分析

i 雄蔵殿

雄蔵殿は天延三年(975年)六十二歳でこの地に隠居した中務卿兼明親王(914年~987年)が亀山の麓に建てた別荘であり、兼明親王は隠遁後、この地で音楽、書道、文学などを楽しんでいたという。

・隠遁としての「見方」と「見え」

兼明親王は『遠久良養生方』の中で「竹、松、石、樹、篁、春の色、秋の光、花、月、鶯、雁、暁の興、晩の望、雲、水、」といった亀山の山麓で隠遁生活を送ることで得られる周辺環境の魅力を詠んでおり、雄蔵殿において視点場から山容全体を眺めることが重要ではなく、「見え」と「見方」が直接的な関係にあるとは言えないが、山の辺という自然を五感で感じるという身体的な山との関わり方をしていたといえる。

・亀の形象についての「見方」と「見え」

雄蔵殿には、兼明親王が亀山に水乞いを祈った結果、霊泉が湧き出したという逸話が残っている。亀は四神中の北方・水の神である玄武や神仙思想における蓬莱山と関係があるため、亀山には宗教的・風水的にいわれの深い亀の霊性にちなんだ見方が多くされている。しかし、雄蔵殿からは、秀麗な亀山を望むことは出来ず、他の視点場において得られる亀形という極めて特徴的な形象が、

既成概念となり、間接的にここの「見方」を規定しているといえる。

ii 棧敷殿

棧敷殿は建長七年（1255 年）に建立された亀山殿の殿舎の一つで、歌合や酒宴などの場として使われていた。

・宴遊の背景としての「見方」と「見え」

『五代帝王物語』に次のような記述がある。

大井河、嵐の山に向て棧敷を造て、向の山によしの山の桜を移し植えられたり。

棧敷殿から見る嵐山の仰角は最大 26.5 度あり、山腹を中心に視界が展開されていたと考えられる。また嵐山は勾配が急であるため、一本一本の木々が立ちあらわれてくる様子が、細かな特徴まで捉えられる。後嵯峨天皇は図 3（図 1 の破線における断面）に示すような高仰角・急勾配の「見え」における特性を十分に活かして桜を植えたと考えられる。

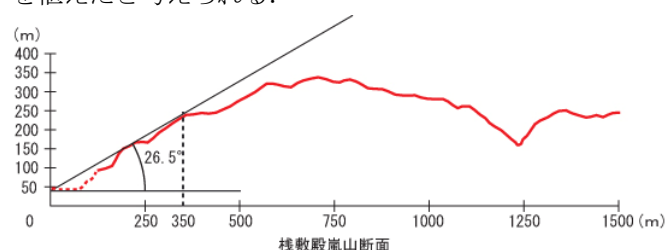


図 3

・蔵王権現についての「見方」と「見え」

蔵王権現とは嵐山に移植された吉野の桜から分霊したとされる修験道の神仏であり、山容における「見え」を権現山として捉える「見方」があるものの、嵐山において固有な視点場における独特の「見え」が伴うものではなかった。それは、蔵王権現という「見方」は、平野から仰ぎ見る「見え」だけに起因するものではなく、霊験を得るため山へ籠もって心身を修練するなかで、生まれたものだからである。嵐山においては、桜を植えたという事実に起因することから、そういった吉野の「見方」を継承したうえで、山そのものにおける観念的思想として定着したと考えられる。

iii 天龍寺

霊亀山天龍寺は、暦応 2 年（1339 年）に夢窓疎石を開山として建立された臨在宗本山の一つである。この地は檀林寺（836）や亀山殿（1255）など時の権力者が寺院

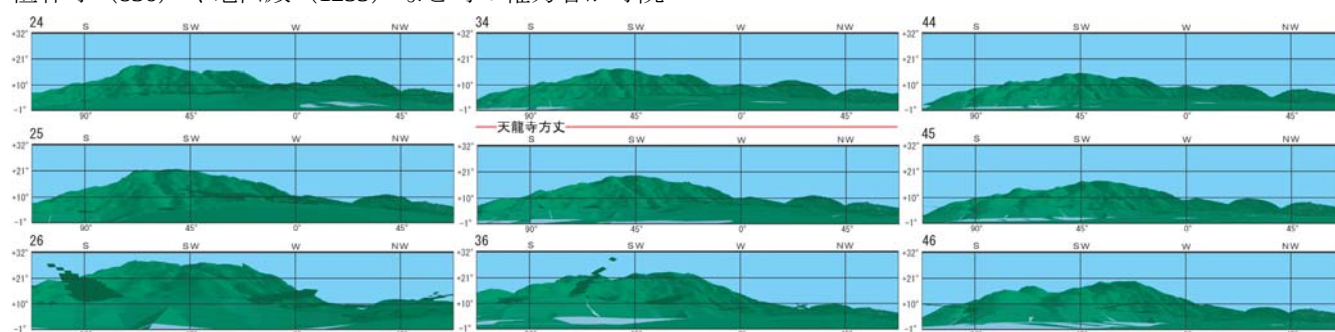


図 4 天龍寺とその周辺観測点における透視形態

や山荘を造営していた。

・禅庭園における風水的「見方」と「見え方」

天龍寺方丈庭園は、亀山殿の苑池を再編し、亀尾山を背景に、嵐山を借景に取り入れた借景庭園である。周辺の観測点（図 1 の四角で囲った周囲 8 点）における透視形態（図 4）を見て比較すると、嵐山・亀山ともに秀麗な山容が望まれる場所に位置しており、後山となる亀尾山も盛り上がっている様子が分かる。眺めに重きが置かれ様式化した他の嵐山を借景している塔頭庭園も、秀麗な山容が望まれる地域に集中している。夢窓疎石はこの土地の山容資源の中でも、嵐山、亀山ともに最も視覚的ポテンシャルの高い位置を選んでいたことが確認できた。また、その高いポテンシャルをもつ「見え」は檀林寺によって発見され、亀山殿における風景嘆願につながり、庭園の構成要素として洗礼された。

・十境についての「見方」と「見え方」

天龍寺創設時、嵐山・亀尾山はそれぞれ、拈華嶺、亀頂塔の建設地として十境に選ばれており、嵐山・亀尾山に宗教的意味が付随され霊山として捉えられた。その両山の関係性を含め、天龍寺十境は桃源郷としての世界観を十分に表現し得ており、その背景には特徴的な山容資源の存在が不可欠であったといえる。

十境についての「見方」は固有の視点場からの「見え」ではなく、十境という文化的核によって創られたある一定の領域から位置づけられており、嵐山や亀山といった山容資源はその良質な景観が展開される領域（景域）の構成要素として意味を成しているといえる。

4. 結果

分析・考察の結果、対象地の地形的・歴史的な景観の多様性が明示された。まず、この地域は、褶曲した地形に囲まれていることで、視点位置によって「見え」の特性が幾多にも変わることが分かった。また、その地形的景観の多様性に対して人々が具体的なアクションを起すことで生み出された、歴史の重層性が存在するということも明らかとなった。そして、これら地形的・歴史的な要因によって、それぞれの視点場に、全く異なる山の風景の捉え方が内在していることが分かった。